

---

# DIEID-FREE-

五十嵐 ゆう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DIEID - FREE -

### 【Nコード】

N8593Z

### 【作者名】

五十嵐 ゆう

### 【あらすじ】

<http://ncode.syosetu.com/s4141a/>

時系列的には、一年後 翔15歳

## 序章【平和】（前書き）

翔「久しぶりだな、諸君。残念だが私は寝るぞ」

優「お前の口調はなんなんだ？」

本日出番なし

勇者「カーッペッ」

## 序章【平和】

翔子（あー、だるい寒い眠い）

優「寝りゃあいいじゃねえかよ、テレパシーで話すくらい怠いんならさ」

翔子（あ、リモコン取って）

優「自分で取れや、魔法使ってさ」

翔子（お？やんのかテメエ？お？）

優「だーもー！分かったよ！ほれ」

翔子（T h a n k s）

翔子「……………」

優「あ？何で俺にリモコン向ける？」

翔子（いや、リモコンで操作出来ないかな？って。やろうと思ったら出来るんだけど）

優「なんかして欲しいなら言えや！何恐ろしい事考えてんだ！？」

翔子（ストーブ付けて、頃合を見て消しといて。おやすみ）

優「……………」

優 どうしてなった……

優（魔法が安定してきたから、全てを魔法に頼って……）

優（そうしたら引きこもりになって……）

優……

翔子（そんな回想いいから、さっさと付けろ）

優（殺すぞ）

翔子（出来るんなら）

優（犯すぞ）

翔子（髑るぞ）

翔子「zzzzzz」

優「……………」

翔子「そうだ、異世界トリップしよう」

優「勝手にしろよ」

翔子「最近弟が冷たい……」

優「充分良心的だわ」

翔子「じゃあ適当に持っていくか」

翔子「拳銃と、警棒と、……あ、なんか飯屋のオヤジに貰った石だ」

翔子「これも持ってこ」

翔子「で、どこ行きやいいと思う?」

優「あ?好きなアニメの世界にでも行けば?」

翔子「……優君が冷たいよお……グスン」

優「うっぜ」

翔子「無視するぞ。うーん、好きなアニメ……禁書とか?」

優「禁書厨が」

翔子「禁書厨だ」

優「じゃあさっさと逝けよ」

翔子「よし!じゃあ行ってくる」

序章【平和】（後書き）

続く

ルイズルイズルイズうううわあああ！【第1章】（前書き）

翔「エオル・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ　オス・スーヌ・ウ  
リュ・ル・ラド

ベオーズス・ユル・スヴェエル・カノ・オシエラ　ジエラ・イサ・  
ウンジュー・ハガル・ベオークン・イル」

翔「エクスプロージョン！」

優「やめろ！」



## ルイズルイズルイズうううわあああ！【第1章】

「あんた誰よ」

翔（……確か俺は、禁書の世界へトリップしようとして……）

「見ろよ！ゼロの『ルイズ』が平民召喚したぜ！」

翔（……ルイズ？ここは、ゼロの使い魔の世界か？）

「うるさい！ちょっと間違えただけよ！」

翔（ゼロ使あんまり知らないんだよね、原作知識皆無であります隊長）

「もう一回召喚させてください！」

「それはダメだ。ミス・ヴァリエール」

翔「あの、」

「アンタはちよつと黙ってて！」

翔「……………Fuck」ボソ

「一度呼び出した『使い魔』は変更することは出来ない。  
何故なら春の使い魔召喚は神聖な儀式だからだ。」

好むと好まざるとにかかわらず、彼を使い魔にするしかない」

「でも！ 平民を使い魔にするなんて聞いたことはありません！」

翔（……………使い魔……………ねえ……………）

「確かに前例はないかもしれないが、それでも君が呼び出した使い魔なんだ。

それとも君はせっかくの魔法成功をふいにするつもりかな？」

「……………」

「では、儀式を続けなさい」

翔（……………うー、眠い……………天使化してまでやるんじゃないかった異世界トリップ

……………つか、今気付いたけど、俺男モードになってるな。翼も収納されてるし）

「あんた、感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから」

翔（明らか日本語じゃないが、俺の自動翻訳魔法で、というかテレパス（弱）に常識は通用しねえ！

……………なに言ってるんだる俺）

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

翔「うおっ！回避

回避は出来なかった、キスされた

翔「、痛ッ、あ、あああ！」

「使い魔のルーンが刻まれてるだけよ、すぐに終わる」

翔（、痛みを遮断……痛みで集中出来ねえ……。アドレナリンの分泌をカット……）

する前に気絶、というか失神？

翔「知らない天井だ……。じゃねえよ、まずは状況の把握を

ルイズ「ようやく目が覚めたのね」

翔「あ、思い出した思い出したー、あははー……」

ルイズ「胃が痛くなる程悩んだけど、諦めて貴方を使い魔にする事にしたわ」

翔「ぶ・ち・こ・ろ・し 確定ね」

ルイズ「はあ？何言って

とりあえず、テレズマで首を撃ち抜く

翔「あ、おはようございます」

ルイズ「……あれ？いつのまに寝て……？」

翔「疲れてたんじゃないツスカ？先輩いきなり倒れたんスよ？」

ルイズ「……んー？……アンタがいきなり「ぶちころす」とか言うて……」

翔「何言ってんスカ？寝ぼけてるんですか？顔を洗ってきた方がいいですよ」

ルイズ「……………」

翔「そうそう、俺の左手の甲にルーン文字的な物が刻まれてたんスけど、先輩これ何か分かります？」

ルイズ「それは使い魔のルーン……」

翔「つまり俺は先輩の使い魔になった、という訳ですね。殺すぞ」

ルイズ「え？今殺すとか」

12

ルイズちゃん は 現実 じや ない？ にや あああああああああん！！うあああああああ！！  
そんな ああああ！！ いやあああああああ！！はあ  
あああああん！！ハルケギニア ああああ！！

この！ちきしょー！やめてやる！！現実なんかやめ…て…え！？見  
…てる？表紙絵のルイズちゃんが僕を見てる？

表紙絵のルイズちゃんが僕を見てるぞ！ルイズちゃんが僕を見てる  
ぞ！挿絵のルイズちゃんが僕を見てるぞ！！

アニメのルイズちゃんが僕に話しかけてるぞ！！よかった…世の  
中まだまだ捨てたモンじゃないんだねっ！

いやっほおおおおお！！僕にはルイズちゃんがいる！！や  
ったよケティ！！ひとりでできるもん！！！！

あ、コミックのルイズちゃああああああああん！！い  
やあああああああ！！！！

あっあんあっああんあアン様ああ！！シ、シエスター！！アンリ  
エッタあああああ！！！！タバサアあああ！！！！

うっうっうっ！！俺の想いよルイズへ届け！！ハルケギニアのル  
イズへ届け！！

ルイズ「ちよっ！ちよっ！何言ってるのよ！」

翔「ドヤ？ねえねえ今どんな気持ち？ねえ今どんな気持ち？」

ルイズ「ご飯抜きにするわよ！」

翔「……はあ……、手品で懷から出したのは、百均で売ってる拡声  
器」

本当は魔法で作ったんだけどね

ルイズ「……？」

翔「これで、ルイズ！ルイズ！ルイズ！ルイズううううわああああああー！！」

ルイズ「や、やめなさい！！」

翔「そろそろ朝食の時間ではないですか？適当に畳んで置いた予備の制服にお着替え下さい」

ルイズ「適当って……アンタ……」

翔「……」

ルイズ「着せて」

翔「………？………ああ、そういえば貴族は、下僕が居る時は自分で服を着ないんだっけ？」

ルイズ「そうよ、だから早く」

翔「めんどくせ………チッ………めんどくせッ………」

そういつつも、悪戦苦闘しつつ、服を着せる

ルイズ「貴族に対してそんな態度で、ただで済むと思ってるの？」

翔「チッ………うっせーな」

そついうと、魔力と殺気を出す。

ルイズ「ッ！」

翔「……ほら、行きますよゴシユジンサマ」  
殺気を消す

ちなみに本気をだせば殺気で、一般人くらいなら殺せる

翔「ほう、成程、ここは貴族専用で、俺は甘んじて此处に居させて貰えて、

この床の小さいパンが俺の朝食、と？」

ルイズ「そ、そうよ」

翔「……せめて水をくれませんか？パンonlyで飲み物無しは正直キツイ気がする」

ルイズ「え、あ、はい」

翔「ありがとう」

翔「もきゅもきゅ……噛みにくっ」



ルイズ「本当だったら使い魔は食事中、外で待機させるんだからね」

翔「そつちから勝手に呼び出しておいで、何を仰っているのでしょう、この姫は」

ルイズ「アンタ……さっきから貴族に向かって……」

翔「本当いいご身分ですこと」

殺気発動

ルイズ「ッ！」

翔「……つまんね……」

殺気解除

ルイズルイズルイズうううわあああ【第1章】（後書き）

続く

人が皆、お前に関心持つと思ってんじゃねえぞ 【第1章】（前書き）

翔「君たち貴族は、魔法を使うんだろ？」

だったら、『天使』と呼ばれた俺は……なんだろ？……天罰？」

優「敵意に向けた相手を気絶させるアレみたいだな」

翔「お前も、立派な禁書厨だな」

作者は、原作を読んでません。アニメと二次創作のみが頼りです  
つか原作を買う金がないというか

人が皆、お前に関心持つと思ってんじゃねえぞ 【第1章】

翔「うおっ！なんだこのトカゲ的な何か！？恐竜？」

恐竜にしては小さいし、何より恐竜は火を吹かない

「この子は私の使い魔フレイム。誰かさんとは違って一発で成功よ」

翔「へえ、凄いですね。撫でていいですか？」

「いいわよ？」

翔「よし。……警戒されてる……」

威嚇された、撫でようとしたら避けられた

翔「……なんですか？なんなんですか？なんなんだよちくしょう」

ルイズ「何下らない事してるのよ」

翔「俺から茶番劇を奪う気ですかご主人様、それは俺に死ねというんですかご主人！」

「ふふ、面白い子ね」

翔「あ、はい、どうもです」

ルイズ「下らない事してないで、行くわよ」

翔「了解」

翔「結局、あの人と自己紹介すらしてなかったが、人間としてどうなの？」

ルイズ「いいのよ、別に！」

翔「お前の事は俺が守るけどさ、権力からはお前が俺を守れよ」

ルイズ「……？何言ってるの？」

翔「あの貴族っぽかったけどさ、俺が挨拶すらしなかった事にキレたらお前が責任取れよ、と」

ルイズ「ああ、大丈夫よ、多分」

翔「そうか」

ルイズ「……いよいよ敬語までなくなったわね……」

翔「敬語じゃなくなるのは親愛の証だよ。

如何に俺が平民といえど、俺は使い魔なんだしさ、親しくても何ら損はしないぜ？」

ルイズ「……………」

翔「信頼度0だと、命令も聞かなくなるぜ？」

ルイズ「……そうね」

もう反論すら出来なくなっただな

翔「で」（神のみ風）

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。

このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に様々な使い魔たちを見るのが、

とても楽しみなのですよ」

翔「床つめてー」

勿論、小声だ

シュヴルーズ「おやおや、随分変わった使い魔を召喚したものです  
ね。ミス・ヴァリエール」

翔（皮肉ですか、皮肉なんですか、皮肉なのか三段活用。どや？）

「ゼロのルイズ！ 召喚できないからって、その辺歩いてた平民を

連れてくるなよ！」

ルイズ「違うわ！ちゃんと召喚したわよ！」

翔「面倒臭いけど、主人の為に反論してあげます。

ミス・シュヴルーズ！その台詞は皮肉にしか聞こえませんか！」

ルイズ「そっち！？」

翔「あと、次いでに、えーと……ミスタ・誰か！三文字以上で謝罪してください！」

「誰がお前みたいなの、平民の言うことなど……」

翔「謝罪しろ」

殺気解放

ほとんどの人が恐怖を感じ、身の安全を図ろうとし始める。机などの下に潜る人が現れるレベル

「すいませんでした！！」

翔「謝罪と感謝はタダなんですし、やる時はやった方がいいんですよ」

殺気解除、笑顔で話す

翔「ミス・シュヴルーズ。杖を下ろして、三文字以上で謝罪してください」

シュヴルーズ「え、ええ。ごめんなさいね、ミス・ヴァリエール」

ルイズ「あ、いえ」

その後、ゴチャゴチャと説明が続く

殆ど知識と感覚で知っていた物なので上の空で聞いていた

四大系統は 火 水 土 風

四大元素と大体同じかなって感じで

そして五つ目に虚無、今では失われたらしい  
虚無、エーテルや空と似たような物だろうと

そして、土が一番重要ですよ、と。これがないと、  
金属を作り出したり、加工したりできないよ、と  
まあ、確かに、教室内は魔力で包まれていたな、って

シュヴルーズ「それじゃあ、誰かに『錬金』をやってもらいましょう  
それじゃあ、ミス・ヴァリエール」

ルイズ「私ですか？」

翔「頑張れ、あの程度、君なら出来るよ」  
小声で言う

なんか知らんが此奴の魔力は結構凄い、翔の1/2000000位は  
ある

「先生、やめておいた方がいいと思いますけど……」

シュヴルーズ「どうしてですか？」

「危険です」



シュヴルーズ「危険？ どうしてですか？」

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

シュヴルーズ「ええ。でも、彼女が努力家ということは聞いています。

さあ、ミス・ヴァリエール。気にしないでやって御覧なさい。

失敗を恐れていては、何も出来ませんよ？」

「ルイズ。やめて」

ルイズ「やります！」

翔（空気不穏やな、とりあえず、防護術式でも貼っとくか）

シュヴルーズ「さあ、ミス・ヴァリエール。

錬金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです」

ドカーン

翔「        ツ！？」

防護術式を貫通した

翔は、四天使レベルの魔力量を誇っている。  
禁書厨なら、この凄まじさは分かるだろう

量ではなく、質

何か分からない、防護を貫通する、何か

質は重要だ

例えば、金すら溶かす王水という液体は、それでもタンタル、イリジウムといった、酸に非常に強い性質を持つ金属を溶かす事は出来ない

翔「面白え……ちくしょう、最高にいいね。愉快に素敵に決まっちゃったぞ……」

ルイズ「ちょっと失敗みた

ルイズは翔が目止まった瞬間、動けなくなった  
なんか、凄い怖い顔してたからだ

翔「で」

なんか罰として掃除しろと

ルイズ「あんた、私のこと馬鹿にしてるでしょ。貴族なのに魔法が使えないなんて、って」

翔「別に俺はそんな事欠片も思っていないぞ？」

ルイズ「嘘！今まで皆そうだった。失敗するたびにゼロだって馬鹿にして」

翔「人が皆、お前に関心持つと思ってんじゃねえぞ」

ルイズ「……っ」

翔「いいじゃないか、別に数百数千失敗しても、それがメンタルポイントになるんだから」

ルイズ「……………」

翔「魔法以外には、お前に価値が無い？」

ルイズ「そうよ……………」

翔「…………じゃあ……………」

翔はポケットの中を探る

そこから出てきたのは、黒光りする拳銃

翔「拳銃くらい分かるよな？」

そういうと、その辺の壁を撃つ

ルイズ「!？」

翔「お前には、価値がないってんなら、まずは死ね」

ルイズの眉間に銃口を向ける

数秒経つ

翔「嘘」

ルイズ「……え？」

翔「殺すつもりなら、最初に召喚された時にやってる」

人が皆、お前に関心持つと思ってんじやねえぞ 【第1章】（後書き）

ギーシュとの決闘までやりたかったが、それは、また今度

ふふふん ふふふん ふっふっふ  
「（前書き）

翔「ルイズのあの爆発を使えば、大抵の奴は黙らせられると思う」

優「そうだねー」

ふふふん ふふふん ふっふっふっ

「君が軽率に香水の小瓶を拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」  
「す、すいません！」

翔「今北産業……なんの騒ぎですかこれ？」  
適当に、その辺の給仕に聞く

要約すると

- ・香水を拾う
- ・二股バレル
- ・八つ当たり

翔「ふうん……見苦しっ！！ギザ見苦しす！」

「君、今なんと？」

翔「見苦しいと言いました、お分かりいただけただろうか」

「ふん……。ああ、君は……」

翔「ミス・ヴァリエールに召喚という名の拉致監禁を喰らいました。  
西田翔という」

「『ゼロ』のルイズが呼び出した平民か。やはり主人と同じく中身も『ゼロ』なのかな？」

翔「……ふっ、いいボケが思いつかないな……。ま、いつか」

「……………礼儀を知らないみたいだね」

翔「いや、礼儀を向けてこない奴に対して礼節を重んじる必要が何処にある？」

「……………この後に及んで減らず口を叩くね……………」

翔「つか、話戻すけどさ。

二股したお前が悪いんじゃない？（笑）

そもそも、そんな事しなければ、こんな小瓶でこんな事に発展せずに済んだものだろう

Q・E・D・はい論破。異論は認めない」

「……………言わせておけば……………！決闘だ！」

翔「決闘？ ああ、あれか、殺し合いという意味の古い決闘か？  
そうじゃなきゃ興味はない」

「ふんっ、今のウチに吠えてるといい。ヴェストリの広場で待つ」

翔「ヴェストリだな？了解した」

翔「で」

ルイズ「あんた何してんのよ！見てたわよ！

なんで勝手に決闘なんか決めちゃってんのよ、あんたは！」



翔「大丈夫だよ、俺にはこれがあるからさ」

翔は、ホルスターから拳銃を取り出し、クルクルと回そうとした所で

翔「危なっ！やべえ！

何ナチュラルに安全装置セーフティがついてない拳銃回そうとしてんだ俺  
！？」

翔が使ってる銃はSIG SAUER P226。

最高級の品質だが

マニュアルセーフティが付いていないのと、価格が高いという理由  
で米軍のトライアルでM92に負けた

これを使ってる理由は、妙に手に馴染んだというだけ

ルイズ「でも、それでも平民は貴族に勝てない物なの！」

翔「まあそうだな、絶対に勝てない物つてあるんだよな。

まあ、でもあんな見下すしか脳がない奴に、俺を殺せると  
は思えないしな」

ルイズ「でも

翔「少しだけ、黙っていてくれないか」

魔術、というか魔法？で黙らせる

詳しく言つと、喋る気が起きなくする

「諸君！ 決闘だ！」

翔「お、おう。何だその掛け声？ダサ　いや、似合っではいるけどさ」

モテない三枚目鼻がプンプンするぜ

「逃げずに来たことは褒めてやろうじゃないか」

翔「褒めても体液と武器しか出ないぜ？　本当身一つで来ちゃったもんだから」

「……………。では始めようか」

「ボクはメイジだ。だから魔法で戦う。よもや、文句はあるまいね？」

翔「敗北は死を意味するこの場では、持てる手段は全て使うべきだ。文句などないよ、代わりに驚くけど」

ギーシュ「よくぞ言った。ボクの二つ名は『青銅』。青銅のギーシュ。」

したがって青銅のゴーレム、『ワルキューレ』が君のお相手でしょう」

翔「……青銅……、スズと銅の化合物か……」

まあいいや、この場合、俺も名乗った方がいいか？」

……………

翔は銃を抜き、両手で構える、狙いは頭部  
明らかに殺す気だ

パンと一発撃ってみる

青銅のゴーレムに遮られる  
銃弾が当たったゴーレムは、  
3 سانت程の穴が空き、そこを中心に大きくヒビが入り、ゴーレム  
は倒れる

「チツ……面倒臭い盾だな」

「!？……まさかワルキューレを砕くとは……だが……」

6体のゴーレムが出現する

「へーいへーいへいへーい」

4発撃つ、4体当たる。ワルキューレ行動不能

「的が大きいと狙いやすいな！　まあ、狙いは足だからそんなに関係ないんだけどね」

それでも、翔は拳銃一つで銃を持った8人のおっさんを殺せたんだ  
から

銃の扱いはお手の物

「あつと2体　ふふんふん」

翔はまるで、子供が玩具で遊んでる様な声で唄いながら引き金を引く  
パンパンと2つの銃声が鳴る

2体居たゴーレムも右足を撃ち抜かれ、バランスが取れずに転倒、行動不能に

「アハハッ！　オイオイこれで終わりとかねえよな？　こっちはまだ牽制しかしてないんですけどお？」

翔は拳銃から弾倉を抜いて、弾数を確かめる

(……残り8発……薬室の入れれば9発か……まあ充分だな)

弾倉を入れ、敵を見る

6体のゴーレムを再び召喚した状態で1体のゴーレムが殴りかかってくる

魔術の才能（？）以外は殆ど運動不足気味の中学生でしかない翔に青銅の鎧の一撃を耐え切れる訳がなく

拳銃を落とし、地面に倒れ伏せる

（油断したツ！？）

とつさに前受身を取って立ち上がる

「……アヒヤハハハハハ！　畜生、分かったよ  
もう油断しねえ。もう余裕をとらねえ。もう隙を作らねえ。  
ありがとうよ、これはもう一生俺に油断させねえいい薬だ  
そんな訳で死ねえええええええ！」

フィジカルメンテナンス  
肉體強化で地面を思いっきり蹴り付ける

地面に軽くヒビが入り、衝撃で土が舞い散る

「な、なんだ!？」

「あははハはははハハ!! 演出ゴクロー!! 華々しく散らせてやるから感謝しろ!!」

そのまま一対の翼を展開  
本気で消す気だ

「あ、亜人!？」

「とりあえずうどう調理しようかな」

無邪気に、楽しそうに、好きな音楽でも聞いているかのように、翔は語る

「た、助けてくれ!!」

「お、おう? ……んじゃ、まあ5割引きで許してやんよ!」

「5割……? か、金!？」

「いやいや、そうじゃなくてえ」

翔は、一つ間を置いて

「お前の皮膚の5割を剥いでやる、それでも生きてたら、許してやるつつつてんだよ」

アハハハハ！ という笑い声と共に、翼の羽を一本ちぎる

「痛ッ！ ……『イル・アース・デル』」

翔は、錬金の呪文を唱える。すると、もふもふの羽が鉄製の刃に変化する

「こ、降参だ！」

その刃はペーパーナイフよりも見劣る程の物であったが、ギーシュは翔に威圧され羽の翼にすら恐怖を覚えた

「……つまんな！ つまんね！ つつまんねえな……………」

翔は、ギーシュに向かって羽の刃を投げる

足にサクツと刺さる

別に大した傷にはならない

「ぎゃあああああああ！！？」

ただ、貴族のおぼっちゃまに、刃物が突き刺さる痛みには耐えられるわけもなく

「さあて、帰るか。テレポ！」

翔「ただいま帰還しましたぜ、ご主人様？」

ルイズ「アンタ亜人だったの！？」

翔「鯨？ あじん？ なんぞそれ？」

ルイズ「誤魔化さないで！！」

翔「誤魔化してない」

ルイズ「……………」

翔「杖を向けんといて、悲しくなるから」

翔は軽く手に光を灯らせる、ちなみに只の光だ

ルイズ「ッ！」

翔「さっさと帰りましょうよ、ご主人様」

ふふふん

ふふふん

ふっふっふ

「（後書き）」

続く



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8593z/>

---

DIEID-FREE-

2012年1月8日20時52分発行